

令和7年度 小金井市立 本町小学校 自己評価・学校関係者評価(中間まとめ)					
学校教育目標					
<p>心身共に健康で、旺盛な好奇心と寛容の心をもち、多様な人と協働的に関わりながら、先行き不透明な時代を明るく前向きに切り拓いていくことのできる児童の育成を図るために、次の目標を定める。</p> <p>◎強い子 ○やさしい子 ○考える子 ○はたらく子</p>					
自指す学校像(ビジョン)					
<p>【自指す学校像】 みんなが誇りに思う本町小 【自指す児童・生徒像】 ◎強い子 (しなやかで折れない心と立ち直る力をもち、積極的に人と関わりながら主体的に課題解決できる子) ○やさしい子 ○考える子 ○はたらく子 【自指す教師像】 ○子供の心に寄り添い、使命感をもって根気強く指導に取り組む教師 ○授業で勝負するプロフェッショナルとして、研究・研修に励む教師 ○組織、社会の一員として、自ら課題を見出し積極的に職務を遂行する教師</p>					
前年度までの学校経営上の成果と課題					
<p>「主体的に焦点を当て、児童が選択、調整、決定する場面の多い複線型の授業を追究することを通して、授業改革を進めることができた。また、コミュニティ・スクールとして、保護者、地域と連携・協働し、児童の積極的に人と関わろうとする気持ちを高めることができた。開校60周年関連行事を地域と共に成功させることができた。今年度の課題である。</p>					
具体的な方策		第1回評価		課題と対策	
		努力目標	成果目標		
授業変革の推進	発達段階に応じて、学習内容や学習する相手、学習するペース等を児童自身が選択できるような複線型の学習に取り組む。	3	4	児童が学習の中で学ぶ方法や内容を選択できる「複線型」の授業は、児童の肯定的評価90%と高い評価を維持している。校内研究や自己申告授業の機会に児童の「主体的な活動」に視点を当て、児童が学習内容や学習する相手、学習するペース等を選択できる複線型の授業変革を推進し、児童の自律的な学びに引き続き取り組んでいく。	地域学習をサポートする機会が何度かあったが、児童が積極的に質問をしたり、調べたりする姿が多く見られる。日頃から児童の主体性を大切にした授業が実施されている様子が分かった。研究授業や自己申告授業で、先生方がお互いの授業を見合い、まなび合う機会があるのがとても良いと思う。
	一人一台端末を活用し、児童が情報共有したり考えを深めたりするような活動を各教科で実施する。	2	4	故障機と予備機の不足により十分な活用が難しい時期があった。児童全員に配備し、活用を更に促していく。学習の共有や考えの交流において不可欠な道具である一方で、ノートやプリントでの手書き端末での文字入力のバランスを考慮し、引き続き一人一台端末を活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図っていく。	一人一台端末で子どもたちが端末の扱いに慣れ、自由に駆使していることを実感している。一方で、ドリルの宿題やプリントの文字が丁寧に書けない児童が多いのが気になる。文字や文章を丁寧に書くといふことは是非、意識させてほしいと思う。学校でも書写の時間や朝の時間などで取り組んでいくとよいと思う。
子どもの権利の尊重	認め、褒め、励ます指導を徹底するとともに、児童の声や意見をよく聞き、教育活動に生かしていく。	4	4	児童の主体性を重視し、様々な場面で児童の想いが反映される活動が行うとともに、児童のよさを多面的な視点から見出し、自己肯定感を高め、安心して挑戦できる環境を整えている。児童の肯定的評価が95.2%と高い評価である一方、30人の児童が否定的な回答をして。個々の児童の様子を適切に把握し、対応していく。	先生方が児童の頑張りを具体的な場面でほめて認めていることで、児童が安心して学校生活を過ごせていると感じる。様々な取組に対して、積極的な児童もいれば消極的な児童もいる。消極的な児童に対して風当たりが強いこともなく、お互いを尊重し合う様子も見られる。否定的な回答をした児童に対しての支援を是非ともお願いしたい。
	年3回のアンケートやWEB-QU等で実態をつかむとともに、ふれ合い月間を中心に全校でいじめ撲滅への取組を行う。	4	4	「嫌なことをされず楽しく学校に通えている」質問への児童の肯定的評価は91%。ふれあい月間で「ピングpongツアー」を行い、学校全体が温かい雰囲気による素敵な企画に育っている。年3回のアンケートやWEB-QUの情報は教職員で共有し、いじめの早期発見、学校いじめ対策委員会を中心とした組織的取り組みにより未然防止と早期解決を図っている。	外国语児童が最近、増加している傾向があり、学校生活にうまく馴染めているかどうか気になる。今年度から日本語指導教室が始まり、日本語の指導と共に適応指導もしていると聞く。自然な形で外国语児童も日本の生活になじみ、他の児童も他国との特徴や文化を知り、お互いにとって学び合う良い機会をしていただきたい。
地域との協働の推進	近隣の大学や地域の人材、施設等と連携してゲストティーチャーを招聘し、専門性を生かした学習を行う。	1	4	今年度から日本語指導が始まり、東京学芸大学に協力を得た指導プログラムに取り組んでいる。一学期は「小金井子どもオンラインズーバー」から子どもの権利に関する授業を6年児童が受け、児童の声や意見を聞く体験の充実を図っている。現時点の実施率は56%だが、二学期以降、本町ゆめ広場の学習を通して、地域人材やゲストティーチャーを多く招く予定。	公民館や図書館へ見学に行った児童から質問がたくさん出てくるので、主体的に取り組んでいる様子がとても見られる。HPから多くのゲストティーチャーや外部講師が教育活動に参加している様子が分かる。2学期以降も専門家や地域の方とともに学ぶ活動が充実しているようなので、引き続き、子供たちの学習意欲を高めていただきたい。
	図書、芝生、学校生活支援、放課後子ども教室、地域未来塾、開校60周年関連行事、本町ゆめ広場等の地域と連携した取組を活性化させる。	4		開校60周年行事や本町ゆめ広場等の取り組みを通して、学校や地域への愛着を深めることを目標に、更なる地域連携に取り組んでいる。コミュニティ・スクール3年目として、地域のイベントへの参加が増え、学校と地域の距離が近くなっている。ボランティア評価では、更なる活性化のアイデアを多く寄せていたいおり、少しずつ具現化に努めている。	地域や関係機関と連携した取り組みは、他校に比べて大変充実していると感じている。朝の登校の見守りや、児童の学習や生活の支援サポートをしてみたいと手を挙げてくださる方もたくさんいる。どのような場面で活用できるのかを考えていけるとよい。東京学芸大学との連携も、様々な授業や行事、取組でうまくできていると感じる。
特色ある学校づくり	体力テストの結果をもとに体育の授業改善を行い、運動の日常化につながる授業を実施する。	3	3	体力テストの結果を基に、児童の実態に即した授業改善を行い、体力の向上を図っている。「学校2020レガシー」として、なわとびや持久走などの体育的活動の充実、外遊びの奨励を通して、楽しみながら運動に親しむ態度を育成している。二学期は6年生が「東京世界陸上体験プログラム」、4年生が「デフリンピック参観」を通して運動への関心を更に高めていく。	児童の運動への関心を高めていくことが大切を感じている。様々な体験が「自分もやってみたい」というモチベーションにつながっていくとよい。「ボーラーチャンピオン」などのスポーツを取り入れていてよいと思う。放課後にも、校庭で野球やサッカー、ボール遊びなどを子供たくさんおり、運動の日常化に役立っている。引き続き、放課後子ども教室と連携しながら取り組んでいくとよい。
	東京学芸大学と連携した森林教育や海の移動教室での体験を生かした環境学習等、環境を教材とした学習を行なう。	2	3	小金井市気候非常事態宣言を受け、東京学芸大学と連携した森林教育や校庭芝生を活用した環境学習を通して、環境問題を自分事として捉え、自らできる取り組みを考え実践する態度を育成している。一学期には高学年の林間学校や移動教室と関連した環境教育を通して、児童の主体的な環境に関する取り組みを行なった。	日常的な取組を、児童が主体的に考えていくとよい。成果が目に見えて分かるような取組、例えばポイントを付けるなど、があると児童モチベーションにつながるのではないかと思う。現在PTAが取り組んでいる資源回収などを地域と児童が連携して取り組んでいくことも考えられる。使い終わった教科書など身近なものから考えさせていくと良いと思う。
	特別支援教室専門員、特別支援教育支援員、別室指導支援員、支援ボランティア、SC、SSW等と連携し、個に応じた指導を充実させる。	4		特別支援教育コーディネーターと不登校支援コーディネーターを中心に関係者間で密に連携し、きめ細やかなサポートに取り組んでいる。東京学芸大学の学生が別室指導や日本語指導のボランティアとして支援に入り、個々の教育的ニーズに応じた合理的な配慮と個に応じた指導の充実を図っている。	不登校児童へのサポートが大変充実している。不登校を経験すると、普段、支えてくれている人の感謝や様々なことを考えるきっかけになる。児童だけでなく保護者にも変化が生じる。本町小の別室のように、児童や保護者が安心できる場所、休める場所があるのは大変嬉しい。引き続き、大学生ボランティアを活用し、個に応じた指導の充実をしていただきたい。
	教職員が児童の手本となり、積極的に挨拶をするとともに、保護者・地域とも連携しながら、進んで挨拶する児童を育てる。	4		「一往復半」の挨拶を推奨し、挨拶を褒められた児童の名前を校長室前に掲示し全校朝会で紹介する取り組みを行っている。5月には月間で延べ1,000人を超える児童が挨拶を褒められるなど、挨拶からコミュニケーションの輪を広げる児童が目に見えて増えている。挨拶はコミュニケーションスキルの第一歩として、各学年での指導を一層充実させていく。	本町小の児童の挨拶は、本当に素晴らしいと感じている。積極的に自分から挨拶をする児童が以前に増して格段に増えている。しかし、その一方で挨拶が苦手な児童もいる。自分から挨拶できない児童がフレンジャーを感じることのないよう配慮していただきたい。地域の人は児童に声をかけてよいかと思う方もいるので、誰とでも挨拶をというのは、時節柄、難しいことでもある。